

## Hello Friends!

### — 国際教育交流活動の実践記録からグローバルな保育を考究する —

鈴木 静 学校法人東山学園 認定こども園 Kids Play Park 坂戸あずま幼稚園  
首藤敏元 埼玉大学教育学部 乳幼児教育講座

キーワード：幼児教育、国際交流、Multi-Cultural Competencies

#### 1. 研究背景と目的

グローバル化が進む現代において「国際理解教育」の役割が注目されている。日本においても、広い視野を持つことや国を越えた相互理解を重要な課題とし大きく取り上げられている。その中でもクローズアップされているのが、相互理解・相互交流を基本とした教育プログラムの必要性だ。そして、異文化を持つ人々と共に協調して生きていく「態度」の育成が子ども達にとって極めて重要とし、ESD、Key competencies、Non-cognitive skills、Multi-cultural competenciesといった、数値で測ることのできない対人関係スキルや問題解決能力が国際理解教育においても重要視されている。

Multi-cultural competencies は、日本の子どもにとって将来、言葉や文化の違う人々と協働していく多様性のある社会で生き抜く為に必要な資質である。それでは、日本における国際理解教育が目指すものとは一体どういったものなだろうか。中央教育審議会において以下の「国際化と教育」と題し様々な課題が挙げられている。(文部科学省, 1996)

- i 広い視野と、異文化を持つ人々と共に協調して生きていく態度の育成。
- ii 日本人として、また、個人としての自己の確立を図ること。
- iii 外国語能力の基礎や表現力等のコミュニケーション能力の育成。
- iv 多様な異文化の生活・習慣・価値観などについて「どちらが正しく、どちらが誤っている」ではなく、「違い」を「違い」として認識していく態度。
- v 相互の歴史的伝統・多角的な価値観を尊重し合う態度。

そして中教審はこの教育に体験的な学習などを多く取り入れ、実践的な態度や能力を育成していく必要があると提案している。この提案は20年以上も前のものだが、小学校から英語教育の始まった現在の学校教育にも適用できると考えられる。

そこで本研究では、日本の幼稚園において保護者と連携して行われた国際交流活動の記録から Multi-cultural competencies を培う新しい国際理解教育プログラムを考究する。

#### 2. 坂戸あずま幼稚園における「Teddy bear project」取り組みの経緯

国際理解において重要なのは「コミュニケーション」だ。そして、その手段の一つが言語である。このツールを使えるか使えないかで、多文化社会での人との繋がりは大きく変化する。しかし、中央教育審議会でも改善を図るべきと指摘されているように、日本における英語教育では、「会話」といった実践が行える機会が少なく「言語=Communication tool」としての英語を習得

するには未だ難しさを感じる。英語はあくまで言語であり、人と人とをつなぐ「Communication tool」だ。国際理解教育においてまずは、このことを再認識することがとても重要である。

本研究対象となる坂戸あずま幼稚園では、保育正課で英会話を取り入れていた。しかし、コミュニケーションスキルを培う英語教育を重視する立場からみると、ネイティブ講師の言葉をリピートするだけのカリキュラムに物足りなさを感じ、違和感を覚える。そのため2007年、British Council が募集していた学校間教育交流プロジェクトに参加し、習得した言葉を実際に使える環境づくりを目指すことになった。

しかし、母国語を覚えたての幼児にとって言語には限界があることは確かであり、教師達においても母国語以外の言語には苦手意識が強く二の足を踏む傾向がある。つまり、国際理解において重要な「言語」が障壁となるのだ。更に、通常のカリキュラム外のことには、多忙な教師達の理解を得るにはかなりの時間と労力を費やした。また、当初行なっていた国際交流活動は、手紙や作品の交換を年に1回か2回程行う程度のものであった。作品作りや郵送準備も教師の負担が大きく、失敗に終わった活動や交流は数多くあった。

このように、大きく注目されている「国際理解教育」ではあるが、実際の教育現場で行うには問題が山積みである。しかしそのような中、2009年に初めてイギリス・ノーフォーク州にあるリーハム小学校へ訪問するチャンスが巡ってきた。その際に、何気なく日本からウサギのぬいぐるみを持参し、成田空港からの旅の様子を撮影し記録した。また、リーハム小学校の先生がホームステイを企画し、そのぬいぐるみをリポーターに見立て滞在記録を制作した。この記録集が、両校にとっても好評となり、その後も教師や子ども達が引き続き活動を行うなどし「Teddy bear exchange project」として本格的に国際交流プロジェクトとして展開することとなった。そして交流12年目を迎えた今でも一番人気の交流活動となっている。

### 3. 研究方法

研究対象園である認定こども園 Kids Play Park は、坂戸あずま幼稚園とラパン保育園を有する幼稚園型認定こども園である。クラス数は、保育園が3クラス、幼稚園が11クラス、親支援事業としての入園前未就園児教室が1クラス。3歳児クラスから毎週1回30分から40分のネイティブ講師による英会話正課が年間を通して行われている。また、リーハム小学校は、レセプションクラス（未就学年齢クラス）を含む、7学年・7クラスとなっている。

本研究における研究観察方法は、研究者による参与観察とし、対象教師とのインタビューや日他教師・職員・保護者・子ども達からのインタビューや自由記述式アンケートの結果を研究資料や考察材料として使用した。

そして以下の3項目を検証・評価する事で、本活動が革新的な国際理解教育へ寄与しているか考究した。

- ① 坂戸あずま幼稚園とリーハム小学校による学校間教育交流活動の実践記録から、本活動が **Multi-cultural competencies** を培う革新的な保育へ寄与しているか検証する。
- ② 本活動に参加した保護者や子どもを対象に、当時（活動直後）と現在（2018年）の2回、自由記述式質問紙調査を実施し、意識の変化などを読み取るナラティブアセスメントをもとに本実践を評価する。
- ③ 本活動がその後の保育や授業へどのような変化をもたらしたのかについて実践活動記録をも

とに評価する。

#### 4. Teddy bear exchange project

##### (1) 活動内容

- ① 両校の代表としてぬいぐるみを交換する。

旅をしていることを演出するために、本物のリュックやノート、鉛筆などを持たせた。

- ② 交換したぬいぐるみをレポーターとして、旅日記を作り交換する。

互いの日記の交換期限は事前に話し合いで決める。また旅日記は、学校での活動やホームステイの様子をレポートするなど内容は自由。実際の様子をリアルに報告する為に、必ず写真を添付した。

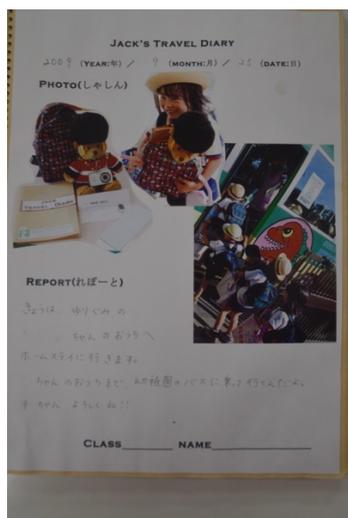
坂戸あずま幼稚園における参加家庭は35世帯、日常的に各クラスが行事や日々の保育の様子をレポートしている。

##### (2) ホームステイ先の選定方法と活動方法

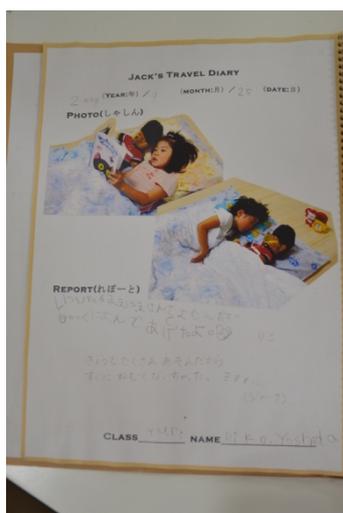
保護者向けに手紙を配布し、ホームステイ希望者を募集。事前に日程も知らせ、参加の意思と希望日程を園へ提出してもらい調整した。すると、人間と間違え「男の子ですか？女の子ですか？」「どんな食事を用意すればいいですか？」といった問い合わせが多く寄せられるハプニングがあった。ホームステイは、1泊2日～3泊4日に設定し、滞在中の出来事を写真付き絵日記のように記入してもらった。記入用紙など必要なものは全て1日目にぬいぐるみと一緒にリュックに入れて子どもと一緒に降園させた。日記は、すべてカラーコピーをし、スクラップブックに貼って保存した。また、2009年～2013年は参加家庭対象に質問紙調査を行った。

##### (3) 実際の活動の様子（旅日記）

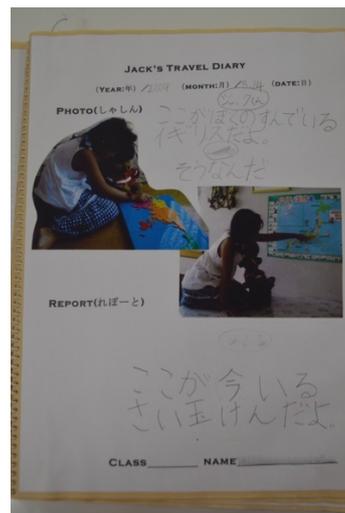
###### 【坂戸あずま幼稚園（日本）】

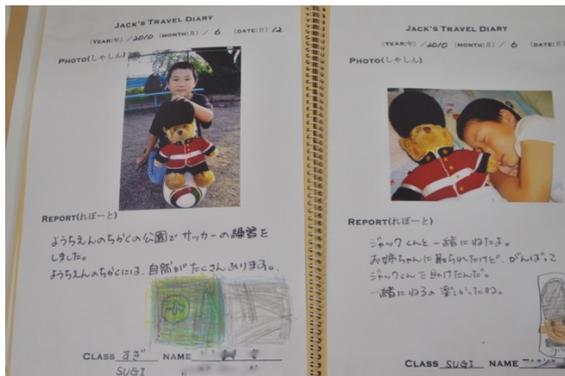


【図1 Rちゃん宅へのホームステイ】

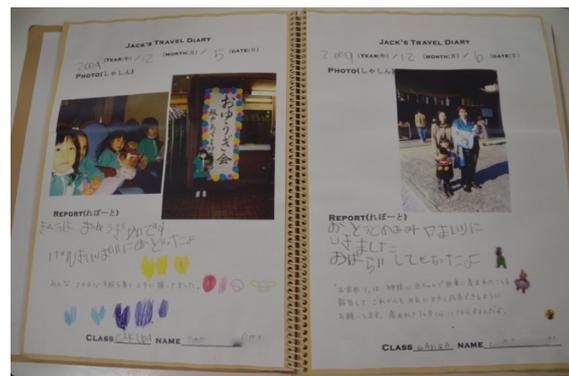


【図2 Hちゃん宅へのホームステイ】

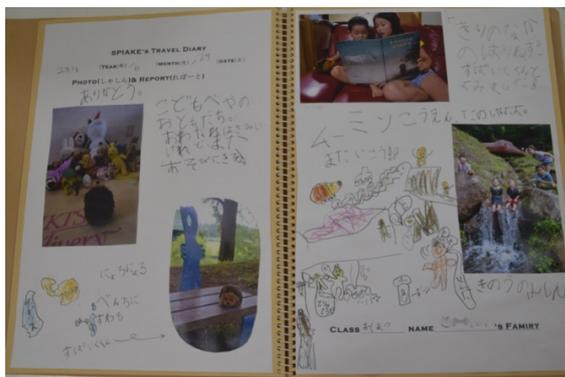




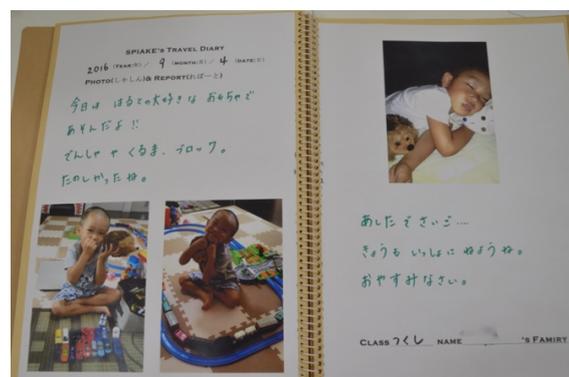
【図3 Tくん宅へのホームステイ】



【図4 Sちゃん宅へのホームステイ】



【図5 Fちゃん宅へのホームステイ】



【図6 Hくん宅へのホームステイ】

## 5. 結果と考察

### 5-1 参加者への質問紙調査結果

#### (1) 活動直後（2009年～2013年実施）

以下にアンケート用紙の自由記述欄に記載された保護者からみた子どもの様子の一部を示す。

- ① 「思っていた以上に子ども達の反応がよかったのでホームステイを頼んで大正解でした。小学校2年生の姉が Jack を大変可愛がっていて、それを見た T がやきもちを焼いていました。ぬいぐるみとはいえ、英国からやってきたお友達は、我が家にいつもと違った風を運んでくれました。我が家は狭いマンションですから、本物の英国人がホームステイするには窮屈です。ぬいぐるみの Jack くんでもよかったです。貴重な体験をさせていただきました。ありがとうございました。」（Tくん保護者、Tくん当時：5歳）
- ② 「ホームステイが決まった時から『あと何回寝たら Jack くんは来るの?』と毎日のように聞いて来る程楽しみにしていました。家に来てからは、ずっと抱っこしてあちこちに連れて行こうとするので汚してしまわないか親の方がヒヤヒヤしました。ホームステイ中、おゆうぎ会、お宮参りと Jack くんもハードスケジュールだったかな?と思いましたが、日本らしい経験ができて良かったと思います。『またホームステイに来てほしいな』と S は言っていますが、色々なお家へ行って、みんなと仲良く楽しいことを経験してほしいと思います。」

Thank you very much. (Sの保護者、S当時：4歳)

中央教育審議会第一次答申における「国際理解教育の充実」の項目内に、外国への修学旅行や交換留学、外国人留学生による交流などの具体例が挙げられているが、幼児教育の現場においてこれらを行うことは容易なことではない。しかし、この調査結果を見ると、イギリスからやってきたなんの変哲の無いぬいぐるみたった1つでその役割を果たしている。勿論、物であるので言葉を発することや意思の疎通を図る事は出来ない。「Teddy bear exchange project」は国際理解教育を行う上でのきっかけや導入として有効であり、年齢や家庭環境等への対応が柔軟性に富んでおり、手軽に楽しく行えるといったメリットがあると考えられる。

(2) 活動を振り返って (2018年実施)

- ③ 「ホームステイ内での活動は、当時小さかったのであまり覚えていませんが、いつも Jack と一緒にいたことをはっきりと覚えています。このホームステイや海外の方との交流をしていたことによって、今、言語を学ぶことにとっても興味があり、高校では外国語科にて英語だけでなく仏語も学んでいます。大学でも外国語を学び、留学して、英語だけでなくその国の文化も学びたいと思っています。」 (Hちゃん 当時：17歳)
- ④ 一番目の参加だったと思います。Jack くん、懐かしいです。どこかに出かけたりした記憶はないのですが、餃子を作ったり、『よさこい祭り』の衣装を着て踊ったりして、日本の小学生の勉強机、勉強風景を写真に撮ったのを覚えています。」 (Hちゃん保護者)
- ⑤ 「丁度、弟が生まれて一ヶ月経った頃だったので、一緒にお宮参りに行った。抱っこして一緒に寝ていた。小学校・中学校の英語学習で耳から入ってくるものはすんなりと受け入れ、だいたいの内容は分かると思うそうです。」 (Sちゃん保護者、Sちゃん当時：13歳)
- ⑥ 「私たちの家に Spike くんが来た時に、オムライスに、一個一個『す』『ば』『い』『く』と書き、Spike くんをおもてなししました。覚えてる？Spike くん、かわいくてふわふわで大好き。」 (Fちゃん、Fちゃん当時：11歳)
- ⑦ 「川に遊びに行ったり、子供会の綱引き大会に参加したりと、特に日本を意識した何かはしませんでした。その中でも『和』や『おもてなし』を(子ども達が)感じ取ってくれたと思います。」 (Fちゃん保護者)
- ⑧ 「家にあるハリネズミの消しゴム人形に Spike くんと言付けて、今でも楽しそうに遊んでいます。スーパーマーケットなどで、英語で数を数えたりして店員さんにびっくりされます。」 (Mくん、Mくん当時：8歳)

調査結果③⑤⑧は、本プロジェクトを通して「英語」という言語に興味関心を持ちその後の進路に影響を与えるなど、言語の習得のみならず異文化理解や自己実現のきっかけとなっている事がわかる。つまり、わが国が目指す国際理解教育(i~iv)に対し有意な結果と考えられる。また、小学校指導要領・外国語教育は「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力の育成」を目標とするなど、他国の文化や言語に対し慣れ親しむ事に注目している。④⑤⑥⑦⑧の調査結果は、一時的な経験で終わるのではなく、時が経っても楽しかった交流活動が子どもや保護者の記憶に残っていることから、この経験が進学後にスタートする外国語教育への導入や自信へつながるのではないかと期待できる。

## 5-2 本活動の考察と評価

### (1) 質問紙調査結果から

本活動は、一番古くて9年経過しているが回答率は100%だった。活動に対しての記憶は全ての回答者が答え、ホームステイしたぬいぐるみの名前も全員が覚えていた。また、回答内容と実際の日記を照合したところ、全ての回答者がホームステイ中の活動内容を的確に答えていた。このことから、本プロジェクトが与えたインパクトが大きかったと評価できる。

そして、本実践は、互いの存在を知り受け入れることから活動がスタートしており、言語に対する障壁がない環境が整備されていると評価できる。特に2回の質問紙調査において、英語で話しかけていたという回答を数多く得たことから、イギリスから来た大事なお友達（ぬいぐるみ）に何かを伝えたいと自ら関わろうとする思いの芽生えが読み取れ、本活動が言語に対する障壁を取り払うきっかけとなると期待できる。

また、母国語や第二外国語といった垣根を超え、「言葉」を互いの想いを伝え理解するための **Communication tool** として自然と受け入れていることから、幼稚園指導要領における言葉の獲得に関する領域に対し有効なプログラムであると考えられる。

更に、学校用に加工された情報ではなく、ぬいぐるみを通して実際の「暮らし」に身を置き・触れ・学ぶことで、確かな知識を獲得できると期待できると考える。また、英国や英語に興味を持ち、進学先に影響を与えるなどの回答結果から、本活動過程は国際理解教育の目的 i ~ iv の育成に大きく貢献していると評価できた。これは、送られてきた相手校の「旅日記」を読んでも同じである。そして、園内で学んだ英語を実際に使用したり保育内で日常的に行っている調べ学習を家庭でも行っていたりすることから、知識理解にとどめることなく反復し継続して学び続けることで、その経験を様々な場面で活かすことができる態度・能力の **Non- cognitive skills** も育成していると評価する。

この様に、家庭を巻き込んだ活動によって、「Teddy bear exchange project」には以下の利点があり、幼稚園・保育所・小学校と様々な教育現場で気軽に取り入れることが可能だと期待できると考える。即ち、①園での学びや活動への理解、②教職員の負担軽減、③長期にわたっての継続が可能、④多角的視点での交流活動の実現、⑤日常生活に密着したリアリティある国際交流、⑥低コスト・低予算という利点である。

### (2) 保育・授業実践への影響と変化から

本活動をきっかけに、坂戸あずま幼稚園では Finland の小学校との交流も行なった。Finland ではぬいぐるみを沢山使用し、物語に特化した教科教育の教授法が行われていた。特に印象的だったのが、帰宅前にその日選んだパペットとハイタッチして帰る姿だ。また、そのクラスの担任は子ども達に「何か相談したいこと、伝えたいことがあったら是非、この小さなお友達にも伝えてね」と話し、子ども達が気兼ねなく自身の思いを伝えられる場を演出していた。その様子と本活動がリンクし、現在坂戸あずま幼稚園では各クラスにぬいぐるみの「お友達」がいる。クラスで話し合っって名前を決め、行事や日々の保育の中で子どもたちを見守る大事な存在となっている。

「大人に話しづらい相談事でもぬいぐるみならできる。」「先生よりもぬいぐるみを通した生活指導の方が子ども達に理解されやすい。」といった実践報告が園内研修において発表されており、子どもと教師の両者にとって有益な関係を築いる。この事から、ぬいぐるみという言葉を持たない第三者の存在の影響力の大きさを実感できる。



【図7 運動会を見守るクラスのマスコット達】

また、本活動がきっかけとなり、日・英リレー方式で物語を作る「ストーリーリレープロジェクト」、両国の野菜の種を交換し育てる「食育プロジェクト」、両校の教師が毎年1回互いの学校を訪問し授業を行う「研修プロジェクト」(2011年より)などの、教育の質を向上させるための実践的な教育交流プロジェクトを展開している。

特に、年1回の学校訪問は実際に両校に足を運び授業を行うので、子ども・教師両方が違う文化や学びを直に体験することができとても有意義な教育的交流となっている。実際の活動内容は、下記の通りだ。

【リーハム小学校にて】

- 2014年 日本の小学校を紹介
- 2015年 お寿司作りに挑戦
- 2016年 折り紙で菜の花製作/書道
- 2017年 ユネスコの文化遺産に登録された和紙を使用した「シェードランプ」作り
- 2018年 リトミック/折り紙で雛人形製作/日本のお茶についてプレゼンテーション
- 2019年 日本語の歌を唄おう・ハートの折り紙お手紙交換/カレー作りに挑戦

【坂戸あずま幼稚園にて】

- 2011年 バケツ田んぼで田植え体験
- 2016年 イギリスのビーチハウス作り
- 2017年 イギリス民謡とダンス
- 2018年 体育指導 ゲームを取り入れた体幹トレーニング
- 2019年 リーハム小学校で人気の巨大ボードゲームを楽しむ/和食マナー体験

また、このような活動を通して、両校の教師が自身の経験をもとに意見交換をしたりする機会が多く設けられている。勿論、両校教師は互いの言語を上手く話す事が出来ない。しかし、身振り手振りを交えながら「伝えたい」「知りたい」と一生懸命に心を動かし得た情報は、帰国後しっかりと保育や授業で活かされている。例えば、保育中に活動を一度中断し、子どもに活動の説明をする前にクラスの雰囲気を落ち着かせるために行う「手遊び」(リズム)のようなものをリーハム小学校で体験した日本人教師は、4年後の今も教室で行なっている。更にこの手法は他のクラスにも波及し、多くのクラス担任がそれぞれアレンジしながら取り入れている。また、「顔」や「表

情」を用いたアート活動では、半分写真半分絵の顔の作品をイヤー1クラスで見た教師は、早速その年に同じ活動を行った。

リーハム小学校では、日本の給食に着目し、マナー良くいただく給食ができる環境づくりとして、学校の食堂改革を数年に一回のペースで行なっている。最近では、「日本食の日」を設け、味噌汁やカレーなどを提供する日がある。また、日本文化に大きな興味を持ち、2018年には1年がかりで校庭の一角に立派な日本庭園を作った。この庭園は、教師や保護者だけでなく、地元のシニアボランティアにも参加いただくなど、地域を巻き込んでの大きなプロジェクトとなっている。今年、茶室を建築中だ。

このように、一つ一つの交流で得たものが豊かな学びやその環境づくりへと繋がっている。

## 6. 結論

他国との交流が容易ではない島国である日本にとって、国際教育交流活動は貴重である。本実践は、何の変哲も無いぬいぐるみが外国からやってきたというたった一つの理由で、新たな学びの風を学校・家庭に運んできた。そして、この一連の活動過程から得た「思考」や「経験」は Multi-cultural competencies を培い、次の新しい学びや教育の質向上の支えとなると考えられる。よって、「国際理解教育の充実」を目指すのであれば、言語に対する障壁がない環境が整備された本活動は、相互理解・相互交流を基本とした教育プログラムであると評価できる。

また、①学校知の枠組みの中に閉じ込められた学びではなく、子ども達の育ちに寄り添い、生活に即した教育交流が行う事ができた。②リアリティある交流活動を行うことで、教師の学びの意欲が増し教育の質が向上する（期待できる）。ことから、「Teddy bear exchange project」は Multi-cultural competencies を育成するために有効であると考えられる。

## 引用文献

- Beeley, K. (2009). *Using the Empathy dolls approach developing emotional awareness in early years settings*. A&C Black Publishers Ltd.
- Glover, J. Friedman, H. L. (2015). *APA fundamentals of consulting psychology: Transcultural Competence – Navigating cultural differences in the global community -*. American Psychological Association.
- 文部科学省(1996). 「21世紀を展望したわが国の教育の在り方について」中央教育審議会第一次答申.
- 文部科学省(2002). 「幼稚園指導要領解説」 ぎょうせい
- 文部科学省(2017). 「幼稚園教育指導要領」平成29年告示.
- 文部科学省(2017). 「小学校学習指導要領」平成29年告知.
- 田中博之(2008). 「フィンランド・メソッドの学力革命 その秘訣を授業に生かす30の方法」, 明治図書.
- Trompenaars, F. & Woolliams, P.(2006). *Cross-cultural competence: Assessment and diagnosis*. Adaptive Options Spring, 5-9.
- Trompenaars, F.(2012). Foreword. In K. Berardo & D. Deardorff(Eds.), *Building cultural competence: Innovative activities and models*. Sterling, VA: Stylus.

(2020年3月31日提出)  
(2020年4月10日受理)

## **Hello Friends! :**

A Study of Global Childcare Through Records of an International Education Exchange Activity

**SUZUKI, Shizuka**

Certified Children Centre Kids Play Park, Sakado Azuma Kindergarten

**SHUTO, Toshimoto**

Department of Early Childhood Education and Care, Faculty of Education, Saitama University

### **Abstract**

The role of 'Education for International Understanding' has garnered a great deal of attention in modern globalised society. With the cooperation of parents, this study examined the records of an international exchange activity conducted in Japanese kindergartens and found that adopting a new approach to childcare can encourage multi-cultural competencies. Multi-cultural competency refers to the ability to overcome differences between people, based on background and belief in order for new values to emerge.

It is an indispensable quality for Japanese children when competing in a multi-cultural society where, in the future, they may be expected to work with people who belong to different cultures or speak different languages. This study examined the effects of cultivating multi-cultural competencies through records of an exchange programme called 'Teddy Bear Exchange Project (TBP)'. In this programme, a stuffed animal was sent back and forth for home-stay between Japan and the United Kingdom. A narrative assessment was conducted among children and teachers who participated in the programme to monitor changes in cultural awareness and teaching method. The effects on other learning activities were also investigated. The study found that (1) commencement of this activity, introduced to allow children from Japan and the United Kingdom to get to know each other, led to the establishment of a barrier-free language environment; (2) by learning through the experiences of a travelling stuffed animal, participants acquired first-hand knowledge that was not filtered by the school curriculum and (3) through participation in this activity, teachers positively responded to further education and improvement in teaching quality. Experience derived from an international education exchange activity such as this is particularly valuable in Japan, where multi-cultural interactions are not always possible. The introduction of a stuffed animal from overseas has brought about a new wave of learning for both school and families. New ideas and experiences gained from this series of activities have led to better quality childcare through the cultivation of multi-cultural competencies in children, teachers and parents. Therefore, to cultivate multi-cultural competencies, children must venture beyond the framework of the school curriculum to participate in education exchanges that enable learning about life in the real world. In conclusion, the 'Teddy Bear Exchange Project' has been found to be an effective multi-cultural educational tool.

**Key Words:** early childhood education, international exchange, multi-cultural competencies